

想夫恋

—平家物語「小督」にもとづく話—

会員 高木 嘉吉

琴の嵐か松風か 尋ねる人の琴の音か

駒引き止めて 立ち寄れば

つま音高き 想夫恋

(黒田節)

これは、黒田節の一調である。そして平家物語の「小督の恋」の、悲しくも哀れな物語りの一場面を歌ったものである。

小督は禁中一の美人で、幾びの女い琴の名手であった。高倉天皇が、寵妃<sup>おとめ</sup>が前を失って、悲歎に沈んでゐるのを慰めようとして、中宮平の徳子（注清盛の女）が差上げたのであるが、その美貌と才気は、たちまち天皇の寵愛を専らにした。

面白くないのは清盛である。小督を召し出して亡いものにしようと考えた。小督はこれをもち聞いて、  
「わが身のこととはどうなるうとも厭わぬけれども、君の御為心苦しい」と言つて、ある日の暮方に、内裏を出て、行方も知らず落ち去ってしまった。

天皇は小督に去られて、虚脱の後日かき過ごした。ある夜、近臣弾正少弐源仲国を召して、小督の搜索を命じた。

「小督は嵯峨野のほとり、并折戸を立て左内に在る」と申す者がある。主の名は分らないが、尋ねあててほ

しい」といふことであつた。

仲国はつくづく思案した。ふと気づいて、ああそうだが小督殿は琴をお弾きなされた。この月の明るさに、君の御事思ひ参らせて、琴を弾き徳は返ことはよもあるまい。内裏で琴をお弾きになつた時、この仲国、笛の役に召されたので、その琴の音は、いさぐで聞いても聞きわけられようものを。嵯峨の里の在家の数は知れぬものだ。片端から廻って尋ねても、何で聞き出し得ないことがある。

そう思つたので、天皇の思ひを伝える書状をいただし、察の馬に乗って、明月に鞭をあげ、西をさして進んだ。

嵯峨について、片折戸のある家を見つけようと、馬の手綱をひかえ、耳をすましたが、琴弾く所はなかつた。

落胆した仲国が、どうしようかと思ひわづらつてゐる時、龜山の傍近く、松の一叢立つほとり、幽かに琴の音をきいた。

琴の嵐か松風か、尋ねる人の琴の音か、覺束なく思つたが、駒を早めて行つて見ると、片折戸を立てた内は、琴を弾き澄ましてゐる。手綱をひかえてそれを聞けば、紛う方ない小督殿の爪音である。樂は何かと聞きすませば、夫を想うて恋うるかと説む、「想夫恋」という曲である。

仲国はようやく小督に会つて、天皇の書状を渡し、慕情の切なることを告げて、内裏に帰ることをすすめた。

しかし小督はうけなわない。仲国はやむなく小督の返書をもらひ、とにかく天皇に報告して、そのご指示を仰ごうと、供の者に小督の守護を命じて、馬に鞭うって内裏に帰つた。

時は過ぎてすでに夜明けであつたが、天皇は昨夜のま  
ま南殿に居られた。仲国は返書をさし上げ、小督の心境  
を伝えたが、天皇の慕情はいよいよついつつ、夕暮れを  
待って具けて参れ、とのことであつた。

仲国は、清盛のことを思うと恐ろしかつたが、君命に  
たし難く、夕暮れをまわって牛車を用意して、嵯峨野に赴  
き、拒む小督を操々に申しすかして、ようやく車にとり  
乗せて内裏につれ帰つた。

小督は内裏の中で、人目につかぬ所に忍ばせ、夜毎召  
されてゐるうち、姫宮が一方お生まれになつた。坊門  
の女院である。

清盛はどこから漏れ聞いたか、「小督が失せたといい  
ことは、跡形もない虚言であつたわい」と言つて、傷り  
をもうけておびき出し、小督を捕えて尻にして杖ち棄て  
た。

小督としては、出家はもとより望みではあつたが、か  
ように心ならずも強いられて尻にされ、歳二十三、濃い  
墨染にやつ果てて、嵯峨野の奥に住むことになつた。  
まことに哀れな極みである。

天皇はこうした事どものため、御悩みつかせられ、  
ついに崩御なされた。時に養和元年(二八年)であつた。  
以上は、平家物語を字易に畧記したものである。

最後の『想夫恋』について一言したい。手許の辞書に  
よると

南奔の相王儉が池を作つて蓮を植え、これを賞した  
ので、時の人これを愛でてこの曲(世雅樂の曲)を作  
り、相府蓮と名づけた。後、白樂天がこれをまじつ  
て想夫恋と書き改めてから、その名になつた。

とある。我が國では平家物語の作者によつて、小督の局

の衣詰に盛り込まれて有名になり、人口に膾炙するに至  
つたのである。しかし曲の内容は、相府(大臣王儉)の池  
の蓮であり、夫を想ひ恋うては無いことは言うまでもな  
い。(おわり)

記録

わがふるさと、元田誌 (14)

室町時代から江戸時代まで

会員 市野瀬 仁

歴史物を流し

大永七年(一五二七)秋、相牟礼十代の城主佐伯惟治は、  
主家大友の軍勢に攻められ、川又に本陣を置いて寄手の  
白井長景の謀略にかかり、相牟礼を棄てた。そして日向  
境の尾高知の峯で悲壯な最期をとげた。

この佐伯氏に仕えていた市野瀬平左衛門(当時二十八歳)  
は、録三百石を賜わり庄官をしていたが、主君を失つた  
ので官を退き、一時床水の一瀬に住んだ。その後大坂本  
村元田の荒木に住みつき、三代安右衛門(宗称)までここ  
で暮らした。今、道の上の杉木立の中にある古塔群には  
年寄くそ見られぬが、連綿と続いた四百数十年の市野  
瀬家の、時の長さを感ぜさせてくれる。毎年盆とまなれ  
ばこの古墓地は浄められ、先祖のお平いをしてゐるが、  
当主市野瀬保彦の家である。館跡はおそらく墓地の左下、  
今荒木宗所有の島地であつたと想う。  
慶長元年(一五九六)といへば大地震があり、別府湾にお